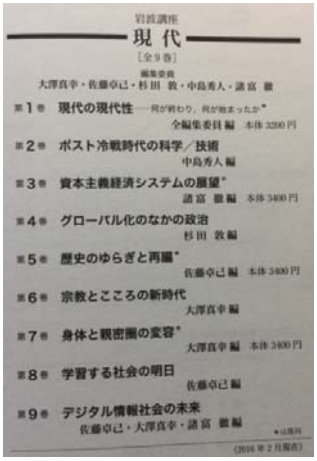
『岩波講座 現代』

表題の講座が 2015 年 10 月に刊行された。まさに「現代」を考えるうえで示唆に富む、写真のような 9 巻におよぶ講座である。さしあたり第 1 巻の「刊行にあたって」を紹介しておきたい。



岩波講座
現代
[全9巻]
編集委員
大澤真幸・佐藤卓己・杉田 敦・中島秀人・諸富 徹

第1巻 現代の現代性——何が終わり，何が始まったか*
全編集委員 編 本体3200円

第2巻 ポスト冷戦時代の科学／技術
中島秀人 編

第3巻 資本主義経済システムの展望*
諸富 徹 編 本体3400円

第4巻 グローバル化のなかの政治
杉田 敦 編

第5巻 歴史のゆらぎと再編*
佐藤卓己 編 本体3400円

第6巻 宗教とこころの新時代
大澤真幸 編

第7巻 身体と親密圏の変容*
大澤真幸 編 本体3400円

第8巻 学習する社会の明日
佐藤卓己 編

第9巻 デジタル情報社会の未来
佐藤卓己・大澤真幸・諸富 徹 編

*は既刊
(2016年2月現在)

20 世紀最後のおよそ 10 年間から現在までのグローバルな現代社会は、二重の不可能性に苦しんでいる。第一に、〈われわれ〉がまさに何者であり、どこへと向かいつつあるのか、その全体像―経済、政治、文化等のすべての側面を含む社会の全体像―を思い描くことができないという意味での不可能性がある。第二の不可能性とは、第一の不可能性を規定する、知と認識のそれである。現在、社会や精神現象を記述し、説明する上で、そもそも依拠する理論や枠組みが分散しており、知の基本的なパラダイムすら存在しない。

これら二つの不可能性は密接に相関し、厳密には分けることができない。『岩波講座 現代』(全 9 巻)は、こうした不可能性に抗して、現代社会とその未来についての像を提供することを目指している。この作業は、社会や精神を捉えるための知を、あらたに再構築する探究を必然的にともなうだろう。

遡れば、およそ半世紀前の 1963 年から 64 年にかけて、岩波書店から、同名の『岩波講座 現代』が刊行された。この旧講座は、国際的には、冷戦の対立、植民地支配から脱却した「第三世界」の勃興、国内的には、60 年安保の余韻が残る中での高度経済成長の進行といった状況の中で構想され、執筆された。だが、旧講座『現代』の最も重要な前提である冷戦が終結し、時代は転換したのに、旧講座退陣後の空席はまだ埋められていない。あらたにこの度、『岩波講座 現代』が構想されねばならなかった必然性は、ここにある。

今世紀に入り、9・11、9・15、3・11 という三つの日付に対応した出来事が、「現代社会」の未来を構想することの大きな困難を、あらためて思い知らせた。9・11(2001 年、同時多発テロ)はこれまでの自由・民主主義に残る根本的な欠陥を直観させ、9・15(2008 年、リーマンショック)は資本主義の破局を予感させた。そして、3・11(2011 年、東日本大震災と原発事故)は、近代社会の大前提である科学技術に根本から反省をせまるものだった。これら三つの日付、とりわけ直近の 3・11 は、この講座の企画を開始させる直接の動機にもなっている。

(2016 年 7 月 11 日)